

新教育課程実施に伴う中・高英語教育の連携

— 語いの指導について —

野村夏治

Teaching of English Words to the 10th Graders

Natsuji NOMURA

中学校の新教育課程実施に伴って

中学校においては、新教育課程が昭和56年度全学年いっせいに実施され、英語の授業時数は各学年3時間になった。高等学校においては、翌57年度から順次学年進行で実施されている。中学校における従来の英語の授業時数は1年から順に4、4、5（または4）時間が多かったので、生徒の履修時数がどのように変化したかという点、57年度高校入学者の中学校の時数は4、4、3であり、58年度入学者は4、3、3となり、59年度入学者から3、3、3となる。

このような中学校における英語の時間数の削減が従来と比べて生徒の学力にどのような影響を及ぼしているのかを現段階において把握しがたいことはいままでの新学習指導要領ではゆとりと充実の教育を行うという大方針のもとで、英語科でも指導事項が精選されている。そのなかの「言語材料」のうち、「語及び連語」だけをとりあげて、どのように精選されているかを旧学習指導要領のものと比較してみよう。

「語及び連語」	(新)	(旧)
必修語	490	610
新語	300～350（各学年）	300～350（1.2学年） 300～400（3学年）
必修連語	基本的なもの	25

英語の学習においては、新出語の指導はきわめて大きな意味をもっているため、各ページごとに出てくる新出語はできるだけ平均するように教科書は考えて作成されている。新教科書は新しく示された言語材料（語、文型、文法事項など）の学年指定に従って書き改められているので、教科書名が同じであっても新旧では内容が異なる。しかもいっせいで改訂であるから、旧の教科書から新の教科書へ移行する場合のずれが生じる。そのため各年度ごとに学年進行上のずれに対応するための指導上の移行措置がとられている。

中学校の生徒の英語学力の実態については、県内で実施されている各種の広域テストで知ることができる。たとえば、名古屋市立中学校英語教育研究会が毎年秋全学年ごとに共通テストを長年実施しているし、愛知県高等学校英語教育研究会はすでに30年継続して第一学年入学者の学力調査を4月に実施している。このテストも3か年の中学校教育の実態をふまえて研究会独自の立場に立って問題を作成し実施しているのであるが、さらに、高等学校入学者選抜のための学力検査問題は大きな意義をもっている。

愛知県においては、県内の生徒が中学校3年間に学んだ教科書にもとづいて出題される。出

題される語いなどはその教科書で学習したものに限られる。教科書が2種類あればどちらの教科書にも扱われているものに限られ、その語の品詞、意味、用法についても慎重に調査して出題される。かつて bicycle に「自転車」と注がつけられたことがあったが、このような事情を表わしている。

英語の基礎の学習においては、このように学習内容にふくまれる語が新出語であるのか、新しい使い方であるのかを授業者は調べなければならない。同じように、高等学校においても、中学校の教科書を検討し、入学者の学力をできるだけ正確に把握することが重要である。これくらいのことには知っているはずであるとか、以前は習っていたとかといったように、自分勝手にきめこんでしまうことはたいへん大きな指導上のギャップとなってしまう。

高等学校教科書「英語Ⅰ」における「基本語」設定について

中学校の教科書は現在5種類であるが、高等学校のものは数多く出ている。高校の「英語Ⅰ」は、中学校における学習の基礎のうえに新語は400語～500語を扱うと定められている。しかし同じ出版社の教科書が中高と継続して使用されているわけではないので、各出版社は、まず「英語Ⅰ」の編集にあたって独自に「中学校で履修してきた語」を選んで「基本語」として設定しなくてはならなくなる。

中学校の「語い」数は900語～1050語であるが、5種類の教科書で扱われている語は実際は2172語に及んでいる¹⁾。したがって5種類の教科書に共通している語は案外少ないのである。

高校の「英語Ⅰ」の教科書は数多いのであるが、なかには複数出している出版社もある。つまり同じ「英語Ⅰ」にも難易があり、ある教科書の「基本語」は1045語、あるものは970語で巻末に示されている。このほか別に人名、連語のリストがあげられているものもある。生徒の立場からこの「基本語」を見ると、中学校で学習していない語が相当ふくまれていることになり、しかもすでに学習しているとみなされるのである。もちろん、これとは反対に、すでに学習しているか未習語として扱われているものもある。このような事情も高校の先生がたは考慮にいれる必要がある。

新しい中学校及び高等学校の教科書には、このような語及び連語の学習状況についての問題が存在している。今回は特に中学校の必修語が120語減少しているので、この120語が新しい教科書においてどのように扱われているかを興味深く調べてみたが、当然のこととはいえ、従前は必修語であったものさえも教科書のなかで扱われていない語が相当数あることがわかった。それほど教科書による取り扱いは異なっている。

中学校教科書における語いについて

5種類の教科書において扱われている2172語について全部をあげることはやめて、ここではアルファベット順にfまでの主な語だけをあげる。今回の必修語490語以外の語について5種類の教科書のうち何種類で取り扱われているかについて大別したものである。*印のついて語は改訂前は必修語であったものである。

1. 5種類の教科書全部に出てくるもの

*almost, *apply, believe, ball, baseball, beautiful, bed, change (動詞), *children, college, dog, *earth, *England, enjoy, Europe, even, foreign, friendly, front (g以下省略)

2. 4種類の教科書に出てくるもの
able, afraid, against, air, art, *baby, *bicycle, *cake, card, care (名詞), careful, *cat, *clock, *coffee, course, cover, *diary, difficult, *dish, dream, *feet, *field, fight, finger, *floor (以下省略)
3. 3種類の教科書に出てくるもの
Africa, alone, arm, *bag, bank, *behind (前置詞), bow (動), bridge, camera, *cap, capital, *center, church, clear, cloudy, *coat, corner, decide, driver, enter, example, famous, full (以下省略)
4. 2種類の教科書に出てくるもの
*above, angry, bell, *bench, *blackboard, blow, borrow, bow (名), bright, *brown, cent, certain, chicken, China, cousin, *cow, *cross, curtain, dad, *dance, dangerous, dead, discover, *doctor, *doll, dollar, dress, *east, *egg, end (名・動), engineer, factory, farmer, forest, fun (以下省略)
5. 1種類の教科書に出てくるもの
asleep, *autumn, belong, *beside, brush, butter, camp, candle, *climb, correct, custom, deep, drop, duty, *else, exercise, expect, fill, fire, fond, fork, fox, fresh, future (以下省略)

このリストをみると、わたくしたちが漠然とこの語は中学校の教科書で習っているであろうと考えている語が、1種類か2種類の教科書でしか指導されていないことがわかる。最も大切なことは、この地区で使用されている教科書が扱っている語であることはいうまでもない。

テストのねらい及び結果の考察について

中学校で履修する語は基礎的なものである。しかし、基礎的な語であるためにいくつかの品詞、意味、用法をもっているものが多い。たとえば名詞と動詞、形容詞と副詞に用いられるものについて、その両方の用法を学習している語と学習していない語とがある。中学校においてこの多義語の指導がじゅうぶんなされているとは考えられない。

そこで、中学校における多義語の学習について調査することをひとつの目標としてテストを作成してみた。もうひとつの観点は、基本的で大切であると考えられる語であるのに使用教科書では扱われないために、生徒にはたまたま未習語となっている語をいったいどの程度生徒が知っているかを調べてみることである。未習語をふくむテストであるから、慎重を期してこの趣旨を了解していただけた県内の県立高校普通科に限った。数校の先生がたのご協力によって入学後まもなく各1クラスずつこのテストを実施してもらった。

和訳20語のうち、Aの6語は既習語であるが、2つ以上の用法と品詞を学んだもの、Bの9語は同じく既習語であるが、テストの文例において用いられている品詞の用法については未習であると考えられるものである。paidを選んだのはpayは習っているが、その過去形は本文中には用いられていないからである。lightには名詞、動詞、形容詞の用法があるが、「点火する」を学習していて、「光」、「軽い」は未習である。Cの5語は未習語であるが、改訂以前は「必修語」に入れられていたものであり、bathとcenterとは他の教科書では扱われているものである。pairは従来は連語a pair ofとして学んだものであるが、今回は2種類でしか扱われていないものである。perhapsとquiteは改訂前は「必修語」であった語であるが、あえて副詞を選んでみた。文例は全英連編集の単語集⁽²⁾⁽³⁾を参考にした。

和訳20語，英訳30語としたのは特別の理由はない，英訳のD15語は今回「必修語」から除外されてしかも教科書で学ばなかったもの，Eの15語は未習語であるが他の教科書では学ぶものである。なお，教科書について比較検討をしようとするものではないことはいうまでもない。

〔新1年 英語 語いテスト〕

I. 次の文の下線部を日本語にきなさい。

- (A) 1. He knows a lot about animals.
2. I sometimes carry the baby on my back.
3. I'll be back by six o'clock.
4. Everything was new and clean.
5. We clean our room ourselves.
6. He went to bed late last night.
- (B) 7. You must write your answer carefully.
8. My mother is a good cook.
9. She has come from a far country.
10. It is a very fast train.
11. His hope is to go to Hawaii.
12. The light from the sun is made up of seven colors.
13. The box is light to carry.
14. Can you ride a bricycle?
15. I paid much money for the picture.
- (C) 16. I take a bath every day.
17. Our school is in the center of the town.
18. She bought a pair of shoes.
19. Perhaps it will rain in the evening.
20. At last it was quite dark.

II. 次の語を英語にきなさい。

- (D) 21. 上着・コート 22. 卵 23. め牛 24. 人形 25. 技師 26. 馬 27. 東 28. 草
29. 医者 30. 夕食 31. 婦人・淑女 32. ゆりの花 33. 黒板 34. 砂糖 35. 低い
- (E) 36. バター 37. 工場 38. 火 39. 客・ゲスト 40. 氷 41. さる(猿) 42. ドル
43. 義務 44. 座席 45. まちがい 46. 教会 47. 急ぐ 48. 借りる 49. 有名な
50. 役に立つ

実施校4校のうち，A校とB校とはいわゆる進学有名校であるからかなり好成绩であるが，「quite, 技師, 黒板, 工場, ドル, 義務, 借りる」等の語はできていない。他のC校とD校とは現実の姿を忠実に反映していると思われる。はじめにことわったようにこれらの語の大半は未習の語であるから，このテストの結果がわるくて当然であるが，(A)について考察するだけでもいろいろの問題点が浮かび上がってくる。そのなかで by の「…までに」の用法がしっかり把握されていないのではないかと考えて出題してみたが，D校の結果は予想をこえてわるい。なお，till 「…まで」は1種類の教科書で扱われているだけである。(A)の他の問題はだいたい予想どおりである。和訳の問題のうち誤答が多いのは予想どおり(20)の quite と(13)の

表1 誤答者数（和訳問題）

学校 問題人数	A	B	C	D
1	1	2	4	6
2	1	2	3	14
3	1	9	15	30
4	1	1	2	13
5	1	2	0	8
6	0	1	5	15
7	2	1	4	13
8	2	1	2	2
9	3	1	7	27
10	1	0	0	5
11	1	5	6	21
12	3	6	6	18
13	29	30	33	46
14	1	3	2	8
15	1	3	8	6
16	3	3	6	22
17	3	4	8	15
18	3	1	13	22
19	13	13	30	39
20	20	44	46	46

表2 誤答者数（英訳問題）

学校 問題人数	A	B	C	D
21	7	18	19	29
22	5	5	5	7
23	13	18	20	34
24	4	6	2	6
25	34	40	45	46
26	20	26	29	45
27	8	8	17	29
28	16	33	39	44
29	2	2	5	14
30	1	2	2	3
31	9	9	8	19
32	4	5	7	12
33	39	39	45	45
34	27	30	34	41
35	8	7	16	29
36	21	31	36	43
37	36	45	46	39
38	17	37	40	38
39	28	39	43	42
40	12	19	27	25
41	15	19	21	29
42	40	44	44	47
43	46	46	46	47
44	20	27	29	39
45	30	38	45	47
46	22	26	36	42
47	28	38	33	47
48	41	45	46	47
49	10	13	13	22
50	31	41	46	46

light である。副詞は学習の中心事項ではないし、heavy という反意語も 1 種類の教科書にし
か出ていないので生徒には手がかりもなかったようである。全体としてはこの程度であろう。

英語のつづり字を書かせる問題は予想どおりさんたんたるものであるが、よくできる生徒で
あるだけに何とか発音をつづり字に結びつけようと努力したあとがみえる。やはり英語では発
音とつづり字の不一致がいかに大きいか改めて知らされる。まずまずといえるのは「夕食、
医者、卵、ゆり」等である。誤答のおもなものを拾ってみよう。

- | | |
|------------------|--|
| 21. (coat) | cort, caut, coute, court |
| 22. (egg) | egge, ege, eag |
| 23. (cow) | caw |
| 24. (doll) | dall, dool |
| 25. (engineer) | enginer, enginner, engeneer, enjiner 等 |
| 26. (horse) | hose, hourse, hours, houth |
| 27. (east) | eastun |
| 28. (grass) | glass, gress |
| 29. (doctor) | docter, doctter |
| 30. (dinner) | denner |
| 31. (lady) | leady, rady |
| 32. (lily) | lilly, lile |
| 33. (blackboard) | blackboard, black boad, brack bord, black bord,
black bout, black boad, brackbord 等 |
| 34. (sugar) | suger, shuggar, shuger |
| 36. (butter) | batter, bater |
| 38. (fire) | fair, fier, fiyer, figher, faire 等 |
| 39. (guest) | gest, geste, guestte |
| 40. (ice) | ise |
| 41. (monkey) | monky, moncky, munky 等 |
| 42. (dollar) | doller, daller, dol, doll, dall, dal, dallor 等 |
| 44. (seat) | seet, sheat, seate |
| 45. (mistake) | misstake |
| 46. (church) | charch, chrch, churf 等 |
| 47. (hurry) | harry, hury, habby |
| 48. (borrow) | barrow |
| 49. (famous) | famouse, famos 等 |
| 50. (useful) | usefull, use, used, help |

中学校における英語の指導について

英語の基礎学力をつける根本はまず英語を好きにすることである。少なくとも嫌いにしない
ように努力しなければならないが、これが全くむずかしいことである。習った単語を努力して
つづり字をおぼえようという気持ちがなく、自然とおぼえるものだけおぼえればよいとい
うような態度である。規則正しい英語の学習が必要であるのに、きちんと勉強する生活習慣か
できていない生徒は多い。基本的な日常生活習慣さえ身につけていない生徒もある。英語を勉強

しないでいて大学までエスカレーターにのって進んでゆけると考えている生徒もいる。「鉄は熱いうちに打たなくてはならない」のであるが、現実はなかなかきびしい。

このような生徒を相手に基礎学力をつけるために日夜努力しておられる先生がたがたくさんおられる。学級通信を出して指導しておられる先生、教科書の本文をノートに書かせて提出させてきちんと添削しておられる先生、英語メモと称するプリントを作成して予習・復習をさせておられる先生、教科書の本文を絵にかかせてその絵を使う先生、本文から発展する対話をOHPを使って発表させる先生がたが現におられるのである。学校として主体的学習を実践のテーマと定め、協力しておられる先生がたもある。グループ学習などを通じ、やる気を起こさせ、発表させるなどの工夫が望ましい。暗唱をさせるにも、基本文型を絵やチャートやOHP等を使ってやらせることから始まって、2文ずつの対話、もっと長い対話、あるいはひとつのセクションを言わせるものもあろう。それらの対話をさらに発展させて、創作活動を含む対話へと高めるための努力が生徒の発表意欲を高めるであろう。ノートの点検もよい。生徒は板書事項はもちろんのこと、教科書を写してもまちがえるものである。

新学習指導要領によって英語の授業は週3時間になった以上は現実をよく知って対応していくのがよい。週3時間の授業は年間を通すと2.5時間になってしまう。学校行事等だけでなく出張や病気によっても欠ける。その欠けた時間をきちんとした全校的な方策で埋め合わせることは実際の問題としては困難であろう。少しぐらいの埋め合わせはできても、結局は教師への大きな負担となり、実施しにくいと考えられる。課題を与えても実際の授業にかわりえないし、課題の処理も大きな負担となる。

教科書は週3時間の授業で教えることができるように作成されているのであろうが、現実には2時間余の時間数であるため、教科書はその学年で終わるために先生がたはなんらかの処置をしておられるのではなかろうかと考えられる。毎時間の授業の中で、音声の指導、読みの指導は必ず行われるであろうが、内容の理解と口頭練習までであって、とかく書くことに与えられる時間が短くなりやすいと思われる。生徒の書く力はおとっているのに、教室で書かせてみて生徒のおかす誤りを訂正してやらないで、家庭で書いてきなさい、というような宿題を与える。できない生徒は書くことが手がであるから学力差はますますひろがっていくばかりであろう。たとえ5分でも毎時間書くことを指導することが大切である。

書くことの困難さは日本語でも英語でも同じことである。わが国では漢字の読み書きに児童生徒が苦しむが、同じように、英語を母国語とする児童・生徒もつづり字の習得にわれわれの想像を超えた努力を費やしているのである。漢字での誤字、あて字と同じく誤つづりが多く、これは教養の低い証拠とされる。英語ではいろいろな事情によって発音とつづり字の不一致が大きい。現代英語のつづり字からは、現在の発音よりはむしろ1400年に没したチョーサーの発音のほうがよくわかる⁴⁾、という。そのほかに、アルファベット26の字母で英語の40以上の現在の異なる音を表わさなければならない、という表音文字そのものもつ問題もある。1字1音というわけにはいかないのである。英語のつづり字改良はすでに何回も失敗している。漢字の場合のように「るび」をつけるというわけにはいかないのである。

中高英語教育の連携

中学校の英語教育においては、聞く・話す・読む・書くの4つの技能をひとしく伸ばすことをねらっている。学習したことについては、聞いてわかって話せて書けなければならないのである。語いについても同じである。しかし、習った語全部が読めて書けるという目標に到達す

るのは至難のことであろう。しかし、たてまえ論としては習ったものは全部読めて書けなければならぬことになっている。われわれは漢字の学習において、読めるが書けない語があることを知っている。英語においても実情は全く同じである。

中学校においては、履修すべき語い数がわずか 1000 語に限定されているにもかかわらず、実態としては、大きな学力差が生じていて、やさしい基本的な語さえ書けないということになる。中学校で学習する語は基礎的なものであるから、ひとつの語にいくつもの用語がある。これもひとつの意味しか知らないということになる。多義語のじゅうぶんな指導は期待できないであろう。高等学校においては、このような事情をよく知ったうえで、その学校へ入学してくる生徒の実態をつかむことが必要となる。

高等学校の学習指導要領においても、指導事項が精選されている。そのうちの語いについては、3年間で指導する語い数は、従来の 2400 語～3600 語から、英語Ⅰが 400 語～500 語、英語Ⅱが 600 語～700 語、英語ⅡBが 400 語～700 語となっていて、最大数をとっても 1900 語となり、従来の約半分に押えられている。改訂による中・高の履修語は合わせて約 3000 語ということになる。(英語Bでは 5000 語と考えるのが普通であった)。

英語Ⅱ、英語ⅡBの教科書についてその語い数について調べてみるのが大切であろうと思われる。しかし、英語Ⅰの教科書では、「基本語」約 1000 語のうえに 400 語～500 語を加えて作成されているとしても、その教科書で扱った話題によっては特殊な語が出てくるであろうし、数多くの英語Ⅰの教科書で扱われる語は全般としてはきわめて多岐にわたるかもしれない。それは、中学校の基本語が 1000 語であるにもかかわらず、わずか 5 種類の教科書で扱われる語数は 2172 語にわたっていることから推測される。英語Ⅱ、英語ⅡBの教科書も同じく多岐にわたるものと推測される。しかし、わたくしたちは、このような統計の数字から、生徒が多くの語いを学んでいると速断してはならない。生徒の学ぶ教科書で扱われる語いは 3000 語にすぎないのである。

Basic English の立場に立つ人であれば、基本的な語が 3000 語あればじゅうぶんであろう。しかし、この語を使っていろいろのことを表現しようとするれば、動詞句などの多くの慣用連語が多くなる。類似のものが多くなる。この基本語を自由に使いこなして表現したいことを的確に表現できるようになることは望ましいことであろうが、ことばの運用はそんな単純で簡明直さいなものではないと思う。

参 考 文 献

- 1) 中央教育研究所, 中学校英語教科書における語彙調査, 研究報告 19 (1981)
- 2) 全英連編: 新基本英単語活用集, 南雲堂 (1980)
- 3) 全英連編: 中学校英単語活用集, 南雲堂 (1982)
- 4) 安井 稔: 英語教育の中の英語学, 25, 大修館 (1975)